

2021年10月2日

## 夏目漱石の小説を読んで

山口光恒

本年3月末で現役を引退したのを契機として手元の岩波の全集を引っ張り出し、若い頃読んだ漱石の長編小説を全部読んでみた。一度通読したが、感想をまとめるためにもう一度読んだ。その感想が下記の通りである。

### 吾輩は猫である

漱石の最初の小説且つ出世作である。日露戦争（1904年2月～1905年9月）の最中の1905年1月から戦後の1906年8月に亘って執筆され、同人誌ホトトギスに連載されたもの。大変な評判になり、今でも一般の人には坊ちゃんと共に漱石の出世作且つ代表作と考えられている（勿論代表作とはいえないが）。

確かに初めのうちは大宗面白い。特に第3話の寒月君（寺田寅彦がモデル）と金田令嬢の恋を巡って金田夫人が英語教師の先生（珍野苦沙弥、漱石がモデル）を訪ねるあたりは思わず笑ってしまうほど旨い。根底には坊っちゃんと同じく世間知らずだが云う事はまともな教師（自分）を猫の目で面白おかしく書いている。自分の事も猫の目を通してからかっている。書きぶりがいかにも江戸っ子ですっきりしている。人気が出たのは当然と思う。また、これを読んでいると如何に漱石が古今東西の古典から始まって英文学の本を読みあさって、しかもその内容をきちんと記憶しているかが分かる<sup>1</sup>。同じく第3話に首くくりの力学なるものが出てくるが、ここを読んだだけで漱石の読書量が容易に推測できる。しかし随所に真面目な議論も出てくる。それは物事の本質を見るという点だ。学者と金持ちの関係も面白い。

これは高浜虚子に薦められて最初1回限りのつもりで書いたものだ。あまりに評判が良いので次々に書き進めて11話までであるが、後半になればなるほど種切れで、それでも何とか書き続けているのが伝わってきて、少しも面白くなくなる。しかもかなり長いものなので、坊っちゃんと異なり、この本を全部読み通した一般読者はそれほど多くはないのではないかという気がした。かくいう小生も何十年ぶりかで漱石全集を読み返した際、後ろの方は記憶になかったので、おそらく最後まできちんと読まなかったものと思う。

### 坊ちゃん

1906年ホトトギスに発表。無条件に面白い。出だしの「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」という一文がこの小説の全てである。四国のある中学校の教師として

---

<sup>1</sup> 全集で読むと巻末に丁寧な脚注が着く。例えばギボン、レオナルド・ダ・ビンチ、ジョナサン・スウィフト、カーライル、バルザック、旧約聖書などはまだ良いが、スタンラン（フランスの画家）、ペンデニス（サッカーの小説の登場人物、ホウトン（イギリスの科学者）ペネロペ（オデッセウスの妻）等がどんどん出てくる。これではごく一部の人しか分からなかったのではないかと思う。これは漱石の小説全体に共通する問題。

赴任した坊ちゃんは世界中で女中の清だけが味方をしてくれるがあとは皆敵のような状況である。ここでまかり通る陰気な弱いものいじめや自分に対する学生達の反乱に数学教師の山嵐と組んで一暴れし、最後は二人とも辞表を叩きつけて学校を去るというただそれだけの筋だが、これが歯切れの良い江戸弁と松山ののんびりした方言との絶妙な対比効果を齎し、読者をして最後まで一息で読ませる痛快小説に仕上がっている。勸善懲悪でわかりやすい事も人気の秘密の一つだ。これは江戸っ子漱石で無ければ書けなかった小説である。日本人でこれを読んだ事がない人は少なくとも我々の世代にはなかったが、最近はどうだか分からない。しかし現代の若者も読めばすぐに嵌まるだろう。とにかく何度読んでも面白い。

## 草枕

なんと言っても出だしが秀逸だ。「山に登りながら、かう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」という文句は一度読んだら忘れられない。筆者も中学生の頃だったように思うが、中味はさっぱり分からなかったが、ここだけは心に残った。当時から度々意地を通したりしていたので、窮屈な思いをしていたのだろう。

坊ちゃんと同じ 1906 年の小説。既に 1905 年 2 月には日露戦争は終わっていたが、この小説は戦争中の話となっている。五高在職中に熊本県の温泉に遊んだ経験を素材として書かれた。余（画家）は 30 才で那古井の湯治場の温泉に遊び、そこで出会った素封家の出戻りの娘（お嬢様）御那美さんとの関係が中心主題。突然訪ねた画家が日露戦争ですっかり客足の絶えた宿に泊まって案内されたのがたった一つの掃除をしてある部屋で、そこは普段御那美さんが使っている部屋で、床には若冲の鶴の絵が掛かっている。その部屋に彼女が自分の着るものを取りに夜中に無断で入ってくるが、画家は半睡状況である。第 2 の出会いは翌朝画家が風呂から上がったところに彼女がいて、服を着せかけてくれたときで、このときの画家の印象は、美人だが女の顔に統一感はなく、不幸に押しつけられながら、その不幸に打ち勝とうとしている顔というもの、である。

次の機会は春宵時で、画家は少し離れた向こうの縁側を振り袖姿の彼女が何度も往来しているのに見とれている。その直後に画家は温泉に身を浮かしていると三味線を弾き終えた御那美さんが浴室に入ってきて画工に気づかず全裸で身を伸ばしている。これをみた画工は「礼儀の、作法の、風紀のと云う感じは悉く、我が脳裏を去って、只ひたすらに美しい画題を見出し得たとのみ思った」。そして画家は裸体についての観察を始める、とその時女は画工に気づき逃げ去る。ここの描写は実に良い。自然な裸体の美しさが滲み出ている。

それから色々な機会を通して画工と那美さんの色々な場面が描かれる。彼女は美人だが気が強い。最後は彼女の親戚の若い男が日露戦争にかり出されて出征するのを皆で見送る場面である。那美さんから彼女の絵を描いてほしいと頼まれ引き受けるが何か足りず描けない。最後の最後、汽車が出ていく場面で同じ汽車に乗り合わせて満州に落ちぶれる彼

女の元の旦那の顔が見える。それを見た彼女の顔にこれまで一度も見た事のなかった「憐れ」が浮かんだ。「それだ！それだ！それが出れば画になりますよ、と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云った。余が胸中の画面は此咄嗟の際に成就したのである」で終わっている。この場面が秀逸で一番好きだ。漱石の芸術感や那美さんの人物像を存分に説明している。

## 二百十日

同じく 1906 年の小説。はっきり言って面白くない。

## 野分

1 回読んだのを忘れてもう一度はじめから読んでみたが、何か以前読んだことがあるような気がしながら読み進んだ。つまり初読の時の印象がそれほど薄かったと言うことである。しかし最後の方で白井道也が演説をし、学者と金持ちや町人などそれ以外との区別を論じる部面で、明確に以前読んだことを思い出した。思えば漱石はこの演説を書きたくてこの小説を書いたものと思う。実際この演説は面白い。一寸「坊ちゃん」の正義感に似ているが、遙かに理路整然としている。例えば

「一般の世人は労力と金の関係について大なる誤謬を有している。彼らは相応の学問をすれば相応の金が取れる見込みのあるものだと思う。そんな条理は成立する訳がない。学問は金に遠ざかる器械である。金がほしければ金を目的とする実業家とか商売人になるがいい。学者と町人とはまるで別途の人間であって、学者が金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして丁稚に住み込むようなものである」。

また、金持ちを批判して

「自分達は社会の上流に位して一般から尊敬されているからして、世の中に自分ほど理屈に通じたものはない。学者だろうが、何だろうが己（おれ）に頭を下げねばならんと思うのは憫然の次第で、彼らがこんな考えを起こす事自身がカルチャーのないと云う事実を証明している」。

これを書いたのは、吾輩は猫である（1905 年）、坊ちゃん（1906 年）、草枕（同）に続く 1907 年のことで、作家としての地位を築いた時期である。草枕に登場する那美のような女っ気が全くない小説で筋は面白くないが、この演説で漱石が考えている学者というものを世間に問うたという意味で興味がある。実際ここだけが他の箇所とは全く違った迫力がある。明治の末の時代の学者の意気込みが読み取れる。

## 虞美人草

漱石が朝日新聞に入社して初めて 1907 年 6 月から 10 月まで同新聞に連載した小説。かなりの長編である。4 月以降一度読んだのだがこの文章を書くために再度目を通してみると、とにかく面白い。それぞれの人物に明確な個性があり、書き出しから中頃に至る間の様々

な出来事（例えば博覧会での出来事等）がそれぞれ布石となって後で繋がってくる。そして大団円に向かう。ここの緊張感とスピードはいかにもハムレットなどシェイクスピアの悲劇を読んでいるような気になり、一気に読み終わる。

登場人物は宗近 一（はじめ）とその妹の糸子、甲野欽吾とその腹違いの妹の藤尾、小野、小野が大変世話になった井上狐堂先生とその娘小夜子などで、宗近は頭はそれほど良くはないが人間としてしっかりした男、藤尾との結婚を望んでいる。外交官試験に落ちるが最後に漸く合格してロンドンに赴任、糸子はその妹で根本がしっかりした娘。甲野欽吾は哲学を学んだがその後何の仕事にも就かず専ら書齋で勉強をしている財産持ちの静かな男だが、物事の本質を弁え鋭い観察眼を持つ。家も財産も全て藤尾にやると宣言するほどの寡欲家。その腹違いの妹藤尾は謂わばこの小説の主役で、美人だが激しい性格を持ち気が強く常に自分が中心でないと気に食わない女。小野は恩賜の銀時計を貰うほどの秀才だが財産がなく、ほぼ許嫁である恩師の娘小夜子を振って家庭教師をしている藤尾と結婚して財産を得ようとする男、秀才だが優柔不断で腹が据わっていない。小野の恩師の狐堂先生は昔気質の情に厚い人物で一人娘の小夜子と共に京都から東京に出てくるが生活は極めて苦しい。小夜子は専ら小野との結婚を待ち望んでいる。宗近、甲野、小野は大学の同級生で30手前の独身。これらの男女の登場人物の関係が複雑に絡み合い、小野が自分の学友を代理人として井上先生に差し向けて縁談を断ったところから舞台が2転3転し、最後は藤尾のショック死と小野と小夜子の結婚で幕を閉じる。ここは一気に読ませる。

こうした節回しと共に感心するのが一寸した会話を通してその人物の人間像を浮き彫りにし、また心の動きを適切に読者に伝えるところだ。特に小野が井上先生と小夜子を誘って博覧会に行った事を同じ場所にいた藤尾がみて、小野をじわじわと締め付ける会話などは絶妙だ。また、小野の井上先生と小夜子に対する非道なやり方に憤った宗近が小野と直接談判するところも秀逸。一種の勧善懲悪の小説だが、坊ちゃんなどに比べると遙かに深い人間観察が基礎にあり、その分だけ面白い。今の若い人が読んでも面白いだろうし、彼らが自分の行動をほんの少しだけ考え直すきっかけになるかも知れない。

なお、この小説に小野と藤尾が連れ立って大森に行こうとする場面があるが、解説を読むと20世紀初めにはこれは性的な関係を示す事とある。確かに谷崎の痴人の愛では男が女を大森に囲っている場面がある。大森近辺在住の筆者としては些か妙な気分させられる。

## 坑夫

漱石にしては珍しく（足尾銅山の）下級労働者の話。朝日新聞に連載。どこで読んだのかは覚えていないが、このネタは誰かから直接漱石に持ち込んだもののようなのだ。そのせいもあって実感が無い。失敗作だと思う。

## 三四郎

1908年9月~12月の朝日新聞連載。1994年4月の全集第5巻の解説に司馬遼太郎がサ

イデンステッカーとの対談で漱石のうち最も良い作品として三四郎で一致したと書いている。今回 1 回読んだときにはそれほどよい作品とは思えなかったのが、感想を書くに際して再度読み直してみた。登場人物は主人公である小川三四郎は熊本の五高を出て帝大に入学したばかりであるが、本文中に 23 才とある（全集では 345 頁）。浪人をしたにしても大学 1 年生にしては一寸年を取り過ぎているように感じる。恋の相手は里見美彌子で三四郎と同年で Violin を嗜む、三四郎が東京で世話になる人に帝大理科で研究に没頭している野々宮宗八がいる。野々宮と美彌子の長兄がすぐ後で述べる広田先生の弟子で知り合い。美彌子の両親と長兄は既に無く、次兄の恭助と暮らしている。野々宮の妹よし子は美彌子と大の仲良しである。三四郎の同級生に佐々木与次郎がいるが、この男は調子の良さで生きている男、この男の下宿先が三四郎が熊本から上京するときに同じ汽車に乗り合わせた広田先生でこの人は一高で英語を教えている。教養は非常にあるが出世欲は全くなく、日露戦争勝利の直後にも拘わらず日本は滅びるなどと云う。また日本の優れた点は富士山であるが、これは日本人がこしらえたものではないともいう。三四郎には郷里にお光さんという女性がおり母親からこの女性との結婚を勧められている。三四郎が上京した当時野々村と美彌子は付き合っている。ざっとこうした関係の中で物語は進んでいく。

これは専ら恋愛小説で、その証拠に三四郎の学友は佐々木以外全く出てこない。但し虞美人草のように誰が誰を好いているかはあまり直截な表現では語られず、会話の中から読者が推測しなければならない。

三四郎の出だしは衝撃的で、大学入学で上京の汽車が名古屋止まりだったこともあり、京都から乗り合わせた一寸よい女の依頼でその女と同じ宿に泊まるが、宿側の勘違いで同じ部屋で一つ布団で寝ることになる。風呂に入っていると女が入ってくるので三四郎は飛び出し、一つの布団を半分に仕切って何事も起こらず一夜を過ごす。別れ際にその女から「あなたはよっぽど度胸のない方ですね」と云われてショックを受ける程うぶな男である。三四郎の解説は必ずこの印象的な場面に触れている。三四郎が初めて美彌子に会う（というよりすれ違う）のは大学構内の池のほとりである（この小説が出てから三四郎池と呼ばれるようになった）。その後入院中の野々宮の妹に届け物をした後病院の廊下で再び美彌子とすれ違うが、このあたりの描写は注意して読むとかなり細やかである。全体を通して明確なことは三四郎が美彌子に惹かれていくことで、これ以外は一寸した会話を通して推察しなければならないという意味で、人間関係がやや判然としない恋愛小説である。

はじめに読んだときには美彌子は虞美人草の藤尾のような男を見下す女かと思ったが読み直してみると必ずしもそうでもない。徐々に親しくなった頃三四郎と二人で菊人形の展覧会から迷い出て、そこで美彌子は自分を迷える子（わざわざ英語では **Stray sheep** と美彌子に言わせている）と呼んでいる。ここで辞書を引いてみると **Stray** とは単に迷うという意外に邪道に陥る、罪に陥るという意味もある。最後に美彌子が聖書の言葉を引用するが、その言葉に繋がっているように思う。さて、このあたりから美彌子の関心は野々村から三四郎に移っているようだ。その直後に美彌子から来た手紙の差出人が **Stray sheep** とあり、

これが二匹描かれており、三四郎はこのうちの一匹が自分だと気づいて嬉しく感じる場面がある。三四郎と美彌子の関係は徐々に深まるが、このあたりも余程注意して読まないとよく分からない。彼は美彌子から「あなたは索引の付いている人の心さえ中（あて）て見ようとなさらない呑気な方」と云われてしまう。この時点では美彌子が三四郎に入れ込んでいるのが分かる。この点は二人で行った展覧会で野々宮と会う場面でかなり明瞭になる。最後の方で美彌子の変化が自分のせいだと云うことを発見して「自分はそれほどの影響を此女の上に有している事を意識する。また三四郎が美彌子に対してあなたに会いたいからここに来たといって、積極的になる場面も描かれている。しかし不思議なのは元々美彌子と付き合っていた野々宮と三四郎の関係に何の変化もないことである。なお、この場面（全集 557 頁）で黒い帽子をかぶり金縁の眼鏡をかけた色艶の良い紳士を登場させている。

途中で野々村が妹のよし子に向かって自分が推薦する男のところに嫁に行くよう説得するが、よし子は会ったこともない人は好きでもきらいでもないのですんなりのところに嫁に行かないという。大団円は三四郎の知らないところで美彌子の結婚が決まるところで、驚いたことにその相手はよし子の縁談の相手である美彌子の兄の友人（上述の「色艶の良い紳士」であった。美彌子の婚約を知って三四郎が彼女に会った際、美彌子は聞き取れないほど小さい声で旧約聖書の詩篇 51 編の「われは我が咎（とが）を知る。我が罪は常に我が前にあり」という。これはイスラエルの王ダビデが部下の妻を気に入ったために夫を戦地に出して戦死させ、その妻を妊娠させた罪に対して神に告白して許しを請う場面の言葉である。これは美彌子が本当は三四郎が好きだったが親の仕送りで大学に通う三四郎を振って色艶の良い紳士と結婚することに若干のやましさがあったものと思う。しかし考えるまでもなく大学 1 年生の三四郎では生活力が無いのでそもそも結婚は無理なはずである。このあたりはよく分からない。やはり謎の部分が多い小説だと思う。

なお冒頭の汽車の場面で三四郎が車中で食べた弁当のからを汽車の窓から投げ捨て、米粒が例の女の顔に当たったとか、広田先生までも食い散らかした食べ物の残りを窓から放り投げる場面がある。20 世紀初めの日本の道徳はこんなものだったようだ。また帝大で学期の初めに授業に出ても教授が出てこないのが当たり前のごとくであるが、今の学生生活とは大分違うようだ。

## それから

三四郎の翌 1909 年 6 月-10 月に朝日新聞に連載。大学を卒業しても定職を持たず親のお金で専ら読書・詩作をする高等遊民が主役として登場。小説の題の「それから」であるが、これは親から勘当された主人公の代助が職業を探しに行く最後の場面の後、それからどうなるか、を指すと思うが、この点は読者の想像に任されている。

主人公は長井代助で大学を出て何もしていない典型的な高等遊民でピアノも弾く。「鍍金を金に通用させようとする切ない工面より、真鍮を真鍮を通して、真鍮相当の侮辱を我慢する方が楽である」と考える男 (96 頁)。彼は「自己は何のためにこの世に生まれてきたのか」

を考え、「無目的な行為を目的として活動している」人間で、世俗的な成功ははなから望んでいない。

父の長井得は江戸時代に切りつけてきた同藩のものを兄と共に斬り殺し一度は切腹を覚悟した男でその後経済界で成功した財産家、兄の誠吾は親の会社で役員をしている。嫂に梅子がいて代助とは気が合う。代助は親の許に毎月生活費を貰いに行き何不自由なく暮らしている。代助の学友に平岡常次郎がおり、この男は社会に出て銀行員となるが失敗、その後新聞社に勤めるが借金に追われている。この妻が三千代で、平岡と三千代の結婚を斡旋したのは代助。三千代の兄は代助や平岡と同級生だったがチブスで死亡。

物語は名古屋で失敗して3年ぶりに東京に戻った平岡が大介を訪ねるところから始まる。平岡から借金を申し込まれて兄に相談するがやめておけと言われる。梅子が自分のお金を貸してくれる。こうしたやりとりを通して、平岡の貧乏暮らしぶりと三千代が幸せに暮らしていないことが明らかになり、代助の三千代に対する思いが徐々に強まる。平岡とは魂胆相照らす中であつたが、その後の生活と経験からお互いの距離が離れていることが明らかになり、昔の関係には戻れない。

そうしたときに父から父が以前世話になった人の関係から地方の財産家の娘を貰えと迫られ代助は逃げまくる。この女性と結婚すれば世間的に見れば将来の暮らしは安泰で、且つ父の財産の相当分ももらえる。この話に積極的な嫂の罠にかかって歌舞伎座で相手の女性と余儀なく顔を合わせたり、父親の自宅で兄夫婦も入れて上京してきた娘と付き添いの人と会食をさせられたりする。今までも何度も結婚を勧められ都度のりくらりと逃げまくっていたが、流石の代助もこの問題を真剣に考えざるを得なくなる。代助が徐々に三千代を訪ねる頻度が上がったある日のこと、代助は三千代と差向で、より長く坐っている事の危険に始めて気がついた。代助は今一歩という際どいところで踏みとどまり家に帰るが、その帰り道で過去の三千代との関係を回想し、「いずれの断面にも、二人の間に燃える愛の炎を見いださないことはなかった」事に気づく (236 頁)。

そこで代助は親の勧める縁談を断固断ることとし、書生に命じて(人力)車を三千代の許にやり自宅まで連れて来させる。代助は「僕の存在には貴方が必要だ。僕はそれだけの事を貴方に話したい為にわざわざ貴方を呼んだのです」。「僕はそれを貴方に承知して貰いたいのです。承知して下さい」。といて最後に三千代も覚悟を決める (279 頁)。これで二人の間で合意が成立し、代助は父に縁談の断りに出かける。そこでは何故断るのかを云わず、他に好きな人がいるのかとの疑問にも答えない。父親はこれにいたく落胆すると共に大いに怒り、今後の世話はしないと申し渡す。これを聞いて代助は「第一の手段として、何か職業を求めなければならぬと思った。けれども彼の頭の中には職業という文字があるだけで、職業そのものは体を備えて現れてこなかった」。

代助はこれで三千代と結婚した場合親のお金を当てに出来ないこととなりかなり動揺する。自分は今まで食う心配が無かったから正論を通して来た。しかしそのお金を自分で稼がなくてはならなくなると果たして自分は卑しくならないかが問題で、この点代助

は自信が無い。三千代を呼んで自分の経済状況を話し、三千代と結婚した場合相当生活水準を落とさない限りやっていけないことを話す、三千代はもとよりそれは覚悟の上と答える。

次は藤岡だ。代助は平岡に会って話を始めるが、この席で三千代が病に伏していることを知る。全てをありのままに話し三千代を譲ってくれと頼む。突然の話に驚く平岡だがそれを承知し、以後絶交を申し渡す。代助は三千代が心配だが相手から絶交を言い渡されているので見舞いにも行けない。代助と平岡の会話の中で平岡から何故君は三千代を自分に周旋したのかと聞かれた代助は、「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛していたのだよ」といい、これを聞いた平岡が呆然とする場面がある。この平岡と代助の直接面談の前から最後に至るまで読者は非常な緊張感を持って読み進めることを強えられる。

翌日兄が平岡の手紙を持って訪ねてきて、その事実関係を問う。代助は全て事実と答える。それを確認した兄は代助に父親の言葉を伝える。大介とは一生涯会わない。親子の縁を切る。兄もまたこれに倣うと。兄が帰った後代助は「一寸職業を探してくる」と言って当てもなく外に飛び出す。これで物語が終わっている。その後三千代との生活はどのようなのかという不安を読者に残したままだ。これがこの小説が「それから」と題された由来と思っただが、漱石の朝日新聞での予告では、この他にこの小説では三四郎は学生だったがそれから先のことを書いた、三四郎は単純だが今度の主人公はそれからのことだという趣旨を含んで色々な意味でそれからと名付けたとある。

この小説は恋愛小説としても非常に旨く書かれているが、高等遊民がその身分を失った場合の理想追求と現実の狭間も取り込んでおり、三四郎などより中身が濃く且つ深いと思う。確かにこの後に続く「門」、「心」と共に漱石の傑作3部作である。2021年8月2日

## 門

「門」は1910年3月から6月まで朝日新聞に連載された。漱石43才の作品。「それから」では平岡から三千代を奪った代助が世間から非難され、父親からの生活支援も打ち切れ、自活のための職業を探しに出るところで終わっている。この小説は正に代助の生まれ変わりのような野中宗助と妻の御米の物語である。

宗助はもともとは相当に資産のある東京ものの子弟として、彼らに共通の派手な思考を学生時代に遠慮無く満たした男である。彼の未来は虹のように美しく彼の瞳を照らした。その頃の宗助は今と違って多くの友達をもっていた。父親の死亡の際、財産の処理を親戚の佐伯に任せしたが、このお金のほとんどを佐伯が使ってしまう、今は役所（といっても下級官吏）から貰う定額の収入でやりくりをする苦しい生活。それでも下女は雇っているので、最下層ではないが、本来であれば上層に行くべき人間。今は崖下のみずばらしい貸家に御米と住み、自分の気晴らしや保養や娯楽もしくは好尚についてですら、節儉しなければならない境遇にある。夫婦の会話には小説や文学の批評はもちろんのこと、男と女の間を陽炎のように飛び回る、花やかな言葉のやりとりはほとんど聞かれない。他人との関わ



りに於いても、自分は自分のように生まれついたもの、他人は他人の運を持って世の中に出てきたものと考え、別種の間人だから何の交渉も利害もないと考えるようになっていた(434頁)。生活面では親類の家に厄介になっていた弟の小六が放り出されて転がり込みそれだけ家は狭くなり、生活費もかさむようになるが、最後の方で小六は大家の坂井家の書生として入り込む。

物語の中頃になって漸くどうしてそのような生活になったかの謎が解けてくる。宗助は本来ならば東京帝大に進学すべきところを事情があって京都大学に入るが、ここでの親友に安井がいる。京都での1年の生活を終え東京に帰り秋に再度京都に往って安井と会うが、安井は彼には何の断りもなく下宿を出て御米と1軒家を構え、御米を妹と紹介する。それから2-3ヶ月で宗助と御米は相思相愛となり、これが元で安井は大学をやめる。しかし二人が親しくなるくだりはほんの2-3頁で、所謂恋愛場面は出てこない。本文には何も書いていないが、実は御米は事実上の安井の妻で、宗助はこれを奪うと云うことで世間や親・親戚から締め出される存在となる。彼らの静かな愛は固く結ばれているが、流産や死産で3度失敗し子供はいない。これが二人を更に近づけることとなる。

こうしてそれなりに波乱もなく幸せに暮らしている宗助に事件が起こる。ある晩崖上の大家の坂井のところに泥棒が入り、この泥棒が逃げるときに盗んだものを宗助の庭に散らかしたことを経緯として坂井との交際が始まる。あるとき坂井の弟が満州にいて、安井という京大にいたことがある男と組んで事業をやっている、その二人が来るからといって招待され、宗助は往かなかったがこれまで封印していた安井に対する原罪の傷口が開き、御米にも打ち明けられず宗助は一人で悩み、10日間の休暇を取って鎌倉の禅寺に修行に往くが、何物も得ず寂しく帰宅する。これで話が終わる。全体に地味な小説で淡々と進む。正に前作の代助のそれからが淡々と描かれている。この意味でそう刺激のある内容ではない。出来れば御米を巡る宗助と安井の葛藤を活写してくれるとそれだけdynamicさが増したと思われる。しかし根底には帝大を出て世間的な出世階段を駆け上がっている秀才に対する漱石の鼻持ちならない感情がこの編に込められているのではないか。2021年8月5日

この後8月は伊豆で10日間ゆっくり静養したり、旧東海道の一部を家内と歩いたり、家内の目の手術の付き添い、さらには片山杜秀著尊皇攘夷を読んだりではぼ1ヶ月間が空き、9月3日から「彼岸過ぎまで」で漸く漱石に戻ってきた。

## 彼岸過ぎまで

1912年1月から4月まで朝日新聞に連載。「門」執筆直後の1910年(明治43年)の修善寺の大患、1911年の五女の原因不明の突然死の後の最初の小説。

主たる登場人物は田川敬太郎、その友人の須永市蔵、その親戚の田口要作と松本恒三、田口の娘の千代子。敬太郎は大学(東京帝大)は出たが職が見付からない27-28才の青年。須永は大学で法学を修めたが資産もあり職業を持っていない。軍人だった父は若死。田口

は実業家で、松本は自ら高等遊民と称して何もしていない。漱石の小説で高等遊民という言葉が使われたのは「彼岸過ぎまで」のみである。松本の二人の姉の一人は須永の母、もう一人が田口の妻。

この小説は7つの短編が集まって一作となっている。敬太郎と須永は友人であるが、敬太郎は須永の親戚の田口のところで職を得ている。この職を得るためにいたずら好きの田口の依頼を受けてある男（実は田口の義弟）のある日の行動を追尾する話があり、ここに千代子も登場するが、ここは恰も探偵小説を読むがごときである。全体の半分以上は田川が如何にして田口とその娘の千代子、それに松本と知り合ったかに当てられる。この一部として話の中に松本の5人いた子供のうち数え年2才の宵子の突然死の話が出てくる。これは直前に五女をこの年で亡くした漱石自身の経験を書いているもので、その後の葬式の場面も含めて漱石の実感がこもった詳細な書き方になっている。残りの半分は須永の話と松本の話でこのうち分量は前者の方が多い。本来この小説の主役の筈の敬太郎は須永の話の聞き役として冒頭にほんの少し出てくるが、それ以降は全く登場しない。

須永の話の全ては彼と千代子の関係と言って良い。須永の母子は類い希なほど親子仲が良いが、この母が長いと息子と千代子の結婚を強く望んでいる。そればかりか千代子が生まれたときに田口の家に入り込んで、将来は息子の嫁にと申し入れを行い、これが後々まであとを引いている。しかし須永は千代子に惹かれてはいるが彼女を結婚する気が無い。千代子は活発で誰とでも機嫌良く付き合い、どこへ出しても上流夫人として立派にやっっていける女である。これに対して須永は頭は人一倍良いが、性格的には消極的でややひねくれている。須永の分析では、千代子は恐れない女であり、自分は恐れる男である。千代子には須永のところにお嫁に来て良いとの感情がなくはないが、そうした場面では悉く須永が引いてしまう。とはいえある夏の日避暑で鎌倉にいる田口一家に誘われて母と一緒に泊まりに行くが、ここで会った高木という洋行帰りで人をそらさない男に嫉妬し、須永は母を置いて帰ってしまう。しかし高木と競争する気持ちにはならない。その後母を送りがてら須永の家に来た千代子から貴方は卑怯だと言われる。この辺りの会話を通した心理描写はうまい。

次に松本の話である。松本は千代子と須永の関係を「彼らは離れるために会い、会うために離れるという関係」と喝破している。松本は自分の姉である須永の母から須永と千代子を何とかして結婚させたいとの相談を受けこれに反対の意見を述べるが、須永が最も尊敬しているのが松本だということで、とにかく自宅に須永を招いて話を聞く。ここで須永と緊張した場面があり、須永から、一番信用していた貴方に裏切られた、自分は一生貴方を恨むとまで云われて、遂に松本は須永の出生の秘密を打ち明ける。須永は父が小間使いに産ませた子であった。その直後母親が病死し、須永の母の了解の下両親の子として育てられたのである。

その後どうも須永の様子がおかしいといって彼の母が様子聞きに来たが、特に何も無いとして引き取らず。須永はそれ以前から卒業試験が終わった段階で関西方面に旅行すると

言っていたので、松本は行く先々から必ず便りをよこすように言いつけ須永がこれを守っている。その手紙を見ると徐々に須永のショックが収まっていくのが実感できるというところで終わっている。

上記の通りこれは短編を集めて一巻としたものだが、須永と千代子の会話、田口や須永の母、また高等遊民松本の描写は流石に巧みである。

## 行人

1912年12月から13年11月まで朝日新聞に連載。前作の「彼岸過ぎまで」と同じ体裁で友達、兄、帰ってから、塵労の4章からなる。彼岸過ぎまで程それぞれがバラバラではないが、中心は兄と兄嫁の不和、その基となる兄の精神的異常からなる。

登場人物は大学を出て都内の建築事務所に勤務する自分（長野二郎）、大学で教鞭を執る学者の兄（一郎）と嫂（お直）、父、母、お重（妹）、芳江（兄の娘で嫂に懐いている）、兄の友人で最後の章で二郎に長い手紙をくれるH氏、友人の三沢、家の食客でその後結婚して大阪の生命保険会社に勤める岡田等々。長野家、H氏、三沢などは金銭的なゆとりは十分ある。

物語の中心人物は兄で、この男は研究や試作以外にはほとんど興味が無い典型的なインテリ学者、この兄は嫂とうまくいっておらず、弟の二郎とお直の間を疑っている。兄が弟に対して、「おれが霊も魂も所謂スピリットも掴まない女と結婚している事だけは慥かだ」という。お直は自分の夫には冷淡に見えるが、二郎とはよく話をする。母、一郎、お直が大阪に旅行していた二郎を訪ねてきたおりに4人で和歌浦に旅行する。そこで兄は弟に対して自分の妻と一緒に和歌山に一泊旅行をして妻の貞節を試してほしいと依頼。驚愕した弟は自分は嫂とそんな関係にはないし、道徳上からもそうしたことは出来かねるとしてこれを断る。その代わり自分が嫂と話をして彼女が夫をどう思っているかを聞こうと言ったところ、兄から日帰りで嫂と和歌山県物をしてその間にお直の話を聞いてくれと言われて引き受ける。ところがその日は朝から天候が荒れ模様で強風が吹き、波も高く、和歌山の割烹で食事をしているうちにとうとう停電となり和歌浦で待つ母や兄への連絡も出来ないまま二人は旅館に泊まってまんじりともせず朝を迎え、翌朝母と兄のところに帰る。その時の経験や翌日の兄との対面を通して二郎は嫂に同情的になっている。

兄夫婦の間には芳江という一人娘がいるが、これがお直には懐くが一郎とはうまくいかない。こうした場面で兄は弟に対して「己は自分の子供をあやすことが出来ないばかりではない。中略。肝心のわが妻さえどうしたらあやせるか未だに分別が付かないんだ」という。

こうしたことが重なって家中がピリピリしている中で遂に二郎が番町の家を出て下宿することとなる。それを兄に言いに行ったときに、兄はダンテの神曲地獄編第5歌の義弟のパオロと通じて夫に殺されたフランチェスカの例を挙げ、この二人の名前は人々に記憶されているがその夫の名はそうではないことに触れながら、「道徳に加勢するものは一時の勝

利者には違いないが、永久の敗北者だ。自然に従うものは一時の敗北者だけれども永久の勝利者だ。中略。ところが己は一時の勝利者にさえなれない。永久には無論敗北者だ」という。

二郎が家を出てからあまり実家に戻らず戻ったときにも兄とは顔を合わせないようにしていたが、そうしたある比突然嫂の来訪を受け、兄と彼女の関係が悪化していることを告げられる。この後の H からの手紙で一郎がお直に手を挙げたことが書かれているが、この後のことかも知れない（何も書いてないので分からない）。その後友人の三沢や他に人から兄が神経をやられているのではないかと、最近では講義もうまくいっていないよだとの話を聞き、H 氏に依頼して兄を旅行に連れ出して貰う。最初は兄がこれを断ったが、数ヶ月して兄も友人 H との旅行に同意した。このとき二郎は H 氏を訪ね、兄には何か変わったところがあれば手紙で知らせてほしいとの依頼をする。この後すぐに二郎は番町（実家）に行き、嫂から兄が旅行に出かけたのは自分に「愛想を尽かしてしまったから。中略。つまり妾を妻と思っていないのよ」との言葉を聞く。兄夫婦の関係は既に破綻している。兄が旅行に出ても一向に H 氏から便りが無かったが 10 日を過ぎた頃 H 氏から長い手紙（約 60 頁）が届く。この手紙で本編は終わっている。

この手紙の中で兄は H 氏に対して自分は「ただに社会にとってのみならず、家庭にあっても孤独である」という痛ましい自白をする。そして家族全員、特に自分の嫁を疑っており、先日は細君の頭に手を加えたという。このとき何度撲つても妻が抵抗しないので自分は益々凶暴になったと言っている。また兄の言葉として下記も紹介されている、即ち、「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか僕の前途にはこの三つのものしかない。しかし宗教には入れない、死ぬのも未練に食い止められそう。もう既に正気を失っているのではないかと、自分は怖くてたまらない」。これに対して H 氏は二郎への手紙の中で、兄さんは幸福になりたいと思って幸福の研究ばかりしたのです。ところがいくら研究をつんでも、幸福は依然として対岸にあったのですと言ってくる。この後も鎌倉や箱根での H 氏と一郎のやりとりが出てくるが、読んでいて実に息苦しくなる。一郎は電車の中や道を歩いている庶民の何も考えない顔は幸福そのものだという話もする。H 氏に言わせると一郎は頭が良すぎるので幸福を求めても観念や考えが先行してしまうので、手に入れるのは難しいことを見抜き、二郎にありのまま報告している。最後の方には宗教問題も出てくるが、これでもかこれでもかの感じである。或いは漱石も連れ合いとの間でこうした悩みを抱えていたのかも知れないが、この辺りは全く霧の中である。直前の「彼岸過ぎまで」、本作「行人」、この後に書く小説「こころ」と 3 作品続いて最後はたった一人による長い話（彼岸過ぎまで）あるいは手紙で終わる。それぞれ趣は異なるが、これは全て高等遊民の男女関係がテーマとなっている。 2021 年 9 月 14 日

## こころ

1914 年 4 月から 8 月まで朝日新聞に連載。漱石 48 才。「彼岸過ぎまで」、「行人」に続く

後期 3 部作の一つ。100 年たった 2014 年 4 月から朝日新聞に再度連載された。新潮文庫の本だけでも 2016 年時点で 718 万部、同文庫のうちで一番売れているが、これは漱石のうちでも更に日本でも一番売れている本とのこと（Wikipedia による）。中味は、先生と私、両親と私、先生と遺書の 3 部からなっている。

話は私と先生との鎌倉の海水浴場での出会いから始まる。筆者（山口）は鎌倉には随分よく泳ぎに行き、大学時代クラブの合宿の場でもあったので筆者にとっても懐かしい場所である。巻末の解説<sup>2</sup>には当時の鎌倉の地図や男女の海水浴の服装、都会族の別荘の様子なども詳しく解説しており、大変楽しい出だしである。後から明らかになるが先生は東京帝大の出身だが特に仕事はせずに遊んでいる所謂高等遊民である。私は先生に初めて会ったときは一高の学生、その後物語の進行と共に大学生になっている。

冒頭に近い部分で、先生が私に示した素っ気ない挨拶や冷淡に見える動作は私を遠ざけようという不快の表現ではなく、「自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのだ」とのくだりがある。これは正に最後に明らかになる先生の人物を暗示している。この他にも「私」の観察として「人間を愛しうる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手を広げて抱き締めることの出来ない人―是が先生であった」との記述がある。

前半の先生と私は自分と先生が徐々に親しくなっていく経過が書かれている。先生と奥さんとは仲が良いが、奥さんから見ると先生は結婚前の快活な青年から徐々に世間に背を向けるようになってきているのが気に懸かり、自分に足りない点があれば言ってほしいと迫るが、先生は奥さんには何ら悪い点がないという。奥さんは是を聞いて益々悩むが、こうした点を除けば愛し合っている夫婦である。自分は父親の病気で郷里に一旦呼び戻されるが、再度上京し、今度は卒論の仕上げに没頭する。

卒論を終えた私は久しぶりに先生に会い、先生を誘って郊外に散歩に出かけた。そこで家の財産の話となり、先生の父親が亡くなった際先生が親戚から裏切られ、財産を失い、これを一生恨んでいることを知る。この事件を契機に先生の思想をよく知るためにその基となっている先生の過去をもっと知りたいと思い、先生の下承を得るが、この場では話せないと言われる。これは最後の先生の遺書で明らかになる。卒業式を終えた私は先生の招待で先生の家でご馳走になる。その時に先生が自分が奥さんより先に死んだら家を奥さんにあげる等々死について語り奥さんに嫌がられる。そこを辞して 2-3 日して自分は国に帰った。職業を焦って探すこともないので 9 月頃まで家にいて、9 月頃また東京に戻ると言って先生夫妻と別れる。これが先生と会う最後となる。

ここから第 2 部の両親と私に移る。帰京後暫くして明治天皇が亡くなり、我が家で予定されていた卒業祝いの会も延期となる。父からの仕送りを基に最後上京する直前に父が倒

---

<sup>2</sup> 筆者が所有しているのは 1993 年から 1999 年にかけて刊行された岩波書店版漱石全集（28 巻＋別巻 1 冊）であるが、総索引等いくつかを除けば巻末に注釈があり、これが実に行き届いている。例えば鎌倉の当時の様子などはここを見るだけでかなり分かる。

れ、私はそちらにかかりきりになる。その時先生から会いたいが出てこられるかとの電報を受け取るが、父の病気を理由にこれを断る。その後父が危篤に陥り親戚一同がその死を待ち受ける。そこに先生から長い手紙が来る。私はこうしたときにとっても落ち着いて読めないで、最後だけ見ると自分（先生）は私がこの手紙を読むときにはこの世にいないとあった。私はそのまま俥を飛ばし、駅から母と兄宛に急用で東京に行くとき書き送って東京行きの汽車に飛び乗り、先生の遺書を車中で読む。

第3部は実に150頁にも及ぶ遺書そのものである。遺書は先ず先生の両親がほぼ同時になくなった後、相当の財産を叔父にだまし取られて人間不信になるところから始まる。その後先生は財産を処分して東京に出てきて軍人の遺族の家に下宿し、そこから大学に通う。そこのお嬢さんがその後先生の奥さんとなる。先生は下宿先の奥さんに気に入られ娘に精神的愛を感じ、あるときには奥さんに娘をほしいと談判することまで考えたが、他人不信に妨げられてこれが出来ない。そうしたところに同郷で親友のKが医者で養家は無断で東京で宗教を勉強していたことを告白したため養家から離縁、実家（僧職）に復籍となり、金銭を絶たれた。それでも頑張って勉強を続けるが、立ちゆかなくなったのを機に先生が自分と同じ下宿に迎える。先生はKを落ち着かせようとして下宿の女主人とお嬢さんにKと話をしてくれるように依頼。これが徐々に成功する。

こうした中で先生の留守中にKとお嬢さんが二人で話している場面を目撃し、先生は嫉妬する。先生はこの間奥さんに娘さんを下さいと言う機会が何度もあったが言い出せない。また、Kに自分はお嬢さんを愛していると言うこともいえないままで煩悶が続く。そうしたある日、Kは突然お嬢さんに対する恋心を打ち明ける。これがあまりに突然だったので先生は咄嗟に自分もお嬢さんを愛していると言う機会を失し、そのまま何も言わないで時が過ぎる。その後暫くして大学の図書館でKに散歩に誘われ、Kからお嬢さんのことで進むべきかどうか迷っているのを先生の判断を聞きたいと言われる。Kの日頃の主張は道のためには凡てをすべきだと言うことで、禁欲は当然のこととして「欲を離れた恋そのものでも道の妨げになる」。こうしてKは身動きできない状況になっており、これを見通した先生は恋に進めば日頃の主張と矛盾するが、主張を通して恋を本当に諦められるのか、それだけの覚悟があるのかと迫る。これに対してKは覚悟なら無いこともないと答える。全体のうちでも極めて緊張感の高い場面である。ここで先生は自分の勝利を確信する。原文では先生をオオカミ、Kを羊に例えて会話が進む。このときは先生はKとの恋の競争に勝つことに専心し、Kとの本当の友情関係を心の内で反故にしている。ここでKの覚悟をお嬢さんに突き進む覚悟と誤解した先生はKに先駆ける必要を感じ、直接奥さんに向かってお嬢さんをほしいと談判し快諾を得てしまう。そのやりとりの始めにKが何か言いませんでしたかと奥さんに確認し、Kが先生に何か言ったのですかと聞かれていいえと嘘をついてしまう。

こうしてKとの競争には勝ったが、自分が倫理に反してKを出し抜いたことから、このことをKに言えないでいる。そうこうするうちに奥さんがKに話してしまう。Kは一見平

然としつつ奥さんにおめでとうと言うが、先生と K の間ではこのことには双方から触れない。この点先生は倫理的負担になっており、愈々明日 K に打ち明けるかどうかを決めようという矢先に K は自殺してしまう。これにより先生が K に懺悔する機会は永遠に失われた。その後暫くして先生は大学を卒業し、お嬢さんと結婚する。二人は仕合わせだが先生には K に対する倫理的負い目がある。結婚当初こそはこれにより幸せな人生を歩むことが出来ると思っていたが、妻即ちお嬢さんと毎日暮らしているとそれを通して K との繋がりが切れない。一時は猛烈に勉強に打ち込んだが暫くしてこれはやめてしまう。妻はこれを敏感に感じて何か自分に隠していることがあるのではないかと突っついてくる。凡てを妻に打ち明けて懺悔すれば妻はこれを受け入れてくれるだろうが先生は奥さんにそうした 1 点のシミもつけたくなかった。こうしたことから先生の生活は行き詰まってきてついには自殺できないまま時が過ぎていた。そこに明治大帝の崩御があり乃木將軍の殉死があった。乃木將軍は西南戦争で官軍の旗を奪われ以来 35 年間死の機会を待っていた。この 2 日後に先生は自死の決心をする。そして遺書の最後に妻にだけはこの遺書を開示しないように依頼している。

以上物語の筋である。全体を通して先生の心の動きは克明に記され、高い教育を受けた人間の若い頃の誤りに対する苦しみ巧みに描写されている。また、遺書の中での先生と K とのやりとりは秀逸である。これを以て漱石の最高傑作とする意見も多いようである。しかしこれを現代の視点から見ると小生は少し違う印象を受ける。先ず（本の中の）私が先生からの遺書を手にして父が危篤状況にあるにも拘わらずその最後を見届けず東京行きの列車に飛び乗るといのはどう見てもおかしいのではないかというのが一つ、第二はこれが最も重要だが、慥かに先生にはそれなりの自殺の原因があることは納得できるが、それによって何も知らない奥さんがどれほどの悲しみと苦しみを永年味あうかという点の配慮がなさ過ぎると思う。この点は前作の「行人」の一郎夫婦と同じで、一郎の態度はあまりにも自分の妻に対する思いやりがかけている。まして先生は妻に対して自分の過去の過ちを告白して謝ればそれで妻も許してくれるし、自分の苦しさも軽減されると言いつつ、妻には一点のシミもつけたくないとの理由でこれをしていない。これは本末転倒である。本当は妻に真実を話すことで自分が友人を裏切った事が知られることがこわかったのではないか。この辺りを漱石はどう思っているのだろうか。第三にこの遺書は決して先生の妻には開示するなとしているにも拘わらず、他の人に何らかの参考になるかも知れないとしている。ということはこの遺書が自分以外の第三者に読まれてもよいと考えている。この場合自分の妻にこの情報が伝わらないとの保証はない。第四にこの作品に限らないが、多くの作品で女性が女は馬鹿だから分からないとか、男からも女を軽蔑すべきものといった会話が散見される。福沢諭吉はこれを是正しようとして貝原益軒の「女大学」を批判する「新女大学」を著して女性教育に努めたが、漱石にはこうした痕跡は見られないのは残念な次第である。2021 年 9 月 18 日

## 道草

第1次大戦中の1915年6月から9月まで朝日新聞に連載。漱石の自伝的小説。冒頭嘗ての養父と通勤途上で出会う場面から始まる。漱石は幼くして塩原昌之助のところに養子に出され、数年間養育を受けたが数年後再度夏目家で生活をしており、成人して夏目家に復籍した。養家では可愛がられたが、復籍の際の養育料を巡って後年まで塩原と気まずい関係にあった。物語は絶縁していた島田が他人を介して健三に近づくところから始まる。この関連で健三の子供の頃や家庭環境が描写されるが、これを通して健三が幸せな家庭で育ったのではないことが読者に分かるようになっていく。健三はおそらく東京帝大教授と推測されるが、数年間東京を離れ、今は毎日勤務先に通い家では書齋で洋書を読む生活を続けている。御住との結婚生活は暖かいものではない。

話が進むに従って健三の姉とその連れ合い（比田）、兄の暮らしぶりも出てくるが、いずれも豊かとは言えず、親類の中で健三のみが留学も果たし見かけ上は成功者となっている。

次いで幼少の頃の養父養母との暮らしの回想に入る。島田夫婦は大変な吝嗇家であったが、健三はこの夫婦から「余所から貰い受けた一人っ子として、異数の取り扱いを受けていた」のである。しかし島田夫婦には健三に対する不安が常にあり、自分たちを健三の実の両親と信じさせるように仕向けていた。夫婦はこうして健三を可愛がったが「その愛情のうちには変な報酬が予期されていた。---そうして彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。---同時に健三の気質も損なわれた。彼の我儘は日ごとに募った」。この辺りの書きぶりは真に迫ったものがある。矢張り漱石がこれに似た実体験をしたからだと思う。そのうちに島田に愛人が出来、御常も再婚し、健三は実家に戻った。

こうした幼少の回想を通して健三が如何に島田夫妻を毛嫌いする湯になったかが詳らかにされる。その後再び現実に戻り島田の再度の来訪を受け、気まずい思いをする。また健三は自分の妻の実家との関係もうまくいっていないことが明らかになる。それどころか健三は自分の細君とも意思の疎通に不自由を感じている。そのうち妻が何回目かの妊娠をするが一向に優しい言葉をかけてやらない。遂に妻を子供連れで実家に帰らせたりする。健三はこれですっきりしたと喜ぶ。この関係はまた元に戻るが妻との関係は元の儘だ。

健三の細君の父親は高級官僚で裕福な暮らしをしており、健三の留学中家族をここに託した。しかし義父は政争に巻き込まれて失職し、生活に困窮するようになっていた。健三は勤めを辞め、僅かな退職金で家を求め家具を購入した。

島田の来訪の度に金をせびられ鬱陶しく思っているところに今度は御常が訪ねてきてこれにも小金をやることとなる。

ここ数年健三は妻の実家との交渉を全く絶っているが、今度は義父が突然訪ねてくる。用件は借金返済の保証人になってほしいとのことである。以前の勢いはみじんもなく、今や健三の古いコートを喜んで貰って帰るまでに追い込まれている。これに対して健三は自分で保証証無しに借りられる金額を友人から借りて融通する。この後暫く健三と義父の関係がどのようにこじれてきたかを説明する場面が続く。こうしている間に3女が生まれる



が、夫婦関係は相変わらずすれ得違ったままである。子供と一体になる母親、それを冷たい目で見ると健三とのやりとりは実にうまい。特に健三が言っていることは筆者（山口）には思い当たるところが多々ある。尚この頃健三がある雑誌に書いた本業とは無関係の小説（ホトトギスに掲載された「吾輩は猫である」のこと）でかなりの原稿料を受け取ったことが出てくる。当時漱石は神経障害に悩んでおり、これを忘れさせようとして高浜虚子が漱石に小説を書かせた事実があるが、慥かに「道草」のこの辺りの健三は随分神経がやられているようである。

小説の最後の部分は島田が代理人を使って昔健三が書いた「不義理はしない」という証文と引き換えに百円出すという場面である。江藤淳によるとこうした証文は確かに漱石復籍の際漱石自身が書いたものようである。

以上道草の粗筋だが仮にこの内容が漱石の自伝にかなり近いとしたら、朝日新聞に入社以前の漱石は金銭的、身体的、精神的に相当参っていたことになる。家庭では妻と意思疎通が出来ず、親戚は全てお金に困っておりお金が全てである、漱石と精神的な話が出来た人は一人もいない。こうした中で一人だけ留学までして大学教授になった漱石が孤立するのは当然だと思う。特に「行人」や「こころ」で生活力の無いインテリの内面の悩みが手紙の形で語られるが、こうした漱石の経験から出たものであることは間違いのないものと思う。この意味で漱石は世間の **Standard** という幸せな人ではなかったと言えるのではないか。

漱石全集には別巻として友人・知人・家族など 100 名近くがが漱石について書いた短文を集めた 1 冊が含まれている。その中には漱石の妻・長女・次男のものがありここには家庭内でも漱石の姿がそのまま描かれている。大変神経質で家庭内で暴力を奮い、あまり理想的な夫でも父親でもない。注目すべきは関庄一郎という人が書いた『『道草』のモデルと語る記』という割合に長い文章で、この人は漱石の養父の塩原昌之助とかつ子（小説中の島田とお藤）夫婦に家に下宿し、その直後に朝日新聞に道草が連載された。この人の見た塩原夫妻は小説中の島田とお藤とは全く反対で、また塩原夫妻が日々連載される新聞を読みながら事実に反すると難じていたことを書き、どちらかという塩原夫妻に同情的である。また、もし小説の通りであったとしても養父をこうまで書かなくても良いのではないかと漱石に批判的である。この人は漱石とも知り合いなので一度漱石に会って事実関係を確認しようと思っていたが、その前に漱石が帰らぬ人となったのを残念がっている。漱石を知る上で一つの参考資料となるべきものである。

## 明暗

第 1 次大戦中の 1916 年 5 月-12 月にかけて朝日新聞に連載。漱石の死去で未完に終わる。登場人物は、企業に勤める津田（30 才）と新婚 6 ヶ月のお延（23 才）、津田の上司の吉川の夫人（津田はこの夫人のお気に入り）、津田の妹のお秀、お延が養育を受けた岡本の家族、それに津田の友人だがごろつきの小林、最後の方に津田との結婚直前に他に嫁した清子な

ど。

冒頭津田の病気（痔病）の話で入院する費用をどう調達するかを話し合っている。この中で津田の父親と新妻（お延）の父親のことが少し出てくる。津田は上司の吉川の承認を得て早速手術を受けるが、その後お延は岡本夫婦に呼ばれて芝居見物をする。そこでお延は吉川夫妻、岡本夫婦それにその長女の継子と会食をすることを知らされる。お延は吉川夫人から嫌われていると感じている。会食には三好という男が同席する。しかし実はこれは継子と三好の見合いで、叔父は延子に三好をよく観察するようにとの意図を持ってその席に呼ばれたことを後で知る。さらに岡本は友人の吉川に延子と夫の津田をこうした席で引き合わせ、津田に有利な状況を造ろうとしていた。生憎津田は手術で欠席したが、お延はその場のやりとりを通して吉川夫人が津田は認めても自分には好意を抱いていないことを感じる。お延は自ら希望した津田との結婚ではあったが、夫婦関係は娘時代に描いていたほど息の合ったものとはなっていなかった。

この辺りから話は岡本一家とお延のやりとりとなる。お延は実の叔母よりも義理の叔父である岡本の方を一層好んでいる。叔父叔母との問答を通してお延と津田とは恋愛結婚をしたことが分かる。半年もしないうちにお延は津田との間が必ずしもぴったりしなくなったことを叔父叔母の前で言えずに涙ぐむ場面がある。

この物語のはじめの方に手術前日の津田が叔父の藤井の家で友人（といっても津田が軽蔑している）小林と会い、その帰路に無理に付き合わされて小林と場末の酒場で話をする場面が出てくる。小林は愈々内地で良い仕事がないので朝鮮に行くという。また、津田の古いコートをくれていって津田の承諾を得る。その後津田が手術で入院中ということを知りつつコートを受け取るため津田の留守宅を訪れそこでお延と対面する。ここで小林は自分は人に嫌われるために生きている、さらにお延の知らない津田を知っているとってお延を翻弄する。別れ際にお延に対して「奥さん、あなたそういう考えなら、よく気をつけて他に笑われないようにしないとイケませんよ」といってお延を激昂させる。この小林という男は最後まで断続的に登場して津田夫婦に暗い影を落とす。しかしこの男のいやらしさを描いた漱石の筆力は相当のものだ。

場面は変わって津田の妹のお秀が病院に見舞いに来ている。津田が以前の借金を父に返済しない中で更に入院費用などで追加の借金申し込みをしたことを京都の津田の父は激怒している。以前の借金を父に認めさせたのがお秀の旦那の堀で、この関係でお秀も困っているが、お秀はお延が津田の父からの借金を自分の服装に代えたと誤解して京都の実家に報告し、実家でのお延の評判を落ととしている。病室で兄と妹が口げんかをしているうちに激昂したお秀が言った津田にはお延以外にまだ大事にしている人があるという台詞を、見舞いに来たお延は聞いてしまう。その前に小林から津田にはお延の知らない過去があると言われてこの点もお延は引っ掛かっている。

ここでお延が病室に入る。お秀が持参したお金の受け取り方を巡り津田とお秀が言い合いをするが、ここにお延が岡本でこしらえた小切手を持参して話がややこしくなる。とう

とう爆発したお秀は津田とお延を人の親切を受けるに値しない人間と切り捨てる。この騒ぎが元で津田とお延の間のわだかまりがとれ、二人は自然な形で己を曝し、お金を融通してくれなかった京都の父への善後策を話し合う。

今度は小林が金をねだりに病室にやってきて、お秀が藤井と吉川を訪ねて今回の兄（津田）との行き違いについて話していたとの情報を齎す。また吉川夫人が来るとの情報もあった。津田は鉢合わせを避けるためにお延に見舞いに来るなどの伝言を出す、お延はその日來訪を受けたお秀に会いに出かけ、二人の女性が神経戦をする。この辺りの心理描写はかなり緊迫且つ面白い。漱石は人の心理の動きを文章にするのに大変な才能を持っていることが分かる。

場面は変わって吉川夫人が津田の見舞いに来る。そこで夫人からお延に対する好意のない批評を聞く。同時に津田が結婚前に吉川夫人の仕向けである女性（清子）と付き合っていたが、最後の段階で相手に逃げられた事が明らかになる。夫人は津田に対する圧倒的優者だが、この点だけは借りがあり、吉川夫婦はお延との結婚の表向きの媒酌人も務める。吉川夫人は津田にお延に満足していないと言わせ、その上で昔の彼女がとある温泉場で静養している、交通費を出すから手術後の静養も兼ねてその人に会いに行けと勧め、遂に津田を説き伏せる。この辺りは読んでいて腹が立つ。上司の奥さんだからといってこんな家庭のことまで指図される筋合いはないはずだ。また、自分の女房の鼻をへし折る教育を吉川夫人に事実上任せてしまうなどもってのほかだ。津田というのは谷崎の小説によく出てくる駄目男ではないか。

小林が朝鮮に行くというので津田はお延の了解を得てレストランで 30 円の餞別を渡す。そこでのやりとり、また、そこに出てくる小林の友人（画家の卵）とのやりとりは読んでいて非常に Frustration を感じる。こんな男はさっさと切り捨てるべきで、これが出来ない津田は男として失格だ。

翌日吉川夫人と約束したとおり静養と清子に会うため温泉場（湯河原がモデル）に行く。ここで首尾良く清子に会うが、会話は全く単調、ここで漱石の死により未完に終わる。筋書きは以上の通りだが、津田の職業は最後まで不明。主として夫婦間、女性間の言葉の戦いが中心となっている。「彼岸過ぎ迄」から「こころ」に至るインテリの葛藤のような緊迫した点はない。登場人物の間の心理描写は優れているが、前作「道草」の 2 倍以上の頁数があり、登場人物も多く、その名前を手元に控えながら読まないとそれぞれの人間関係が分からなくなるほど複雑。まして新聞の連載小説では毎日小出しに読むので読者には登場人物の間の人間関係が非常にわかりにくかったのではないかと思う。本編は一寸高級な男女間の通俗小説の感あり。2021 年 10 月 2 日

## 全体を通した感想

ここで漱石の小説全体を振り返ってみると「明暗」を除き主人公はインテリでその大部分が高等遊民である。こういう人たちは正に日本が開国して諸外国との交際を始め、その

影響を強烈に受けるに従い、それまでの価値観が揺らぎ、精神的に日本の独立を守る点から非常に緊張感に包まれた生活を送っていたのだらうと思う。漱石の小説はそうした中で男女関係を主題としつつこれを描いたと言うことかも知れない。この辺りのやりとりの機微はたいしたものだ。とはいえ本の中に英語、ドイツ語、ラテン語などがよく出てきて、また、物語も東京帝大の卒業生で場所も本郷近辺のものが圧倒的に多い。これでは読者も限られていたことと思われる。当時はそうしたものが分からないというのは恥だとの考えがあったかも知れないが、今では受け入れられないのではないかと思う。現代ではインテリは別として、一般人のうちで少しは教養のある人が分かる或いは楽しめるのは坊っちゃんや吾輩は猫である程度ではないのかというのが率直な印象である。

もう 1 点漱石の小説全編を通して女は馬鹿だから理屈をっても分からないとか、筋道の立った話は女には通じないといった趣旨の会話が男性同士の間だけではなく、女性に向けて男性からも発せられる。これに呼応するように女性の方からも私は女だから難しいことは分からないといったことを男性に言う場面が随所に出てくる。確かに漱石の生きた時代は女性に大学の門は開かれておらず、小説に登場する男は上述の通りほとんど東京帝大出身者という中での会話という点は考慮の要はあるが、この辺り時代の相違を感じる。

最後には是非あげねばならないのは解説の素晴らしさである。実に徹底的に調べ、懇切丁寧な注釈がついている。これ無しでは我々の年代でも分からないことだらけだ。漱石を愛する人たちの熱心さがこれを可能にしたものと思う。

以上